

大義名分

佐々木 知子

小淵総理の死去。それが永田町での昨年の最大ニュースだった。少なくとも一月一日までは。

その三日前、テレビ番組に出演し、「野党内閣不信任決議案に欠席・賛成する可能性」を明確に否定した加藤紘一氏は、二日後、評論家らとの宴席で、「次の組閣は自分がする」と宣言したのである。以後、「欠席」から「賛成」「〇〇パーセント成功」に発言はエスカレートし、それに乗ったか乗せられたか、マスコミが「政局」一色に染まったことは記憶にまだ新しい。

先行きの見えない世紀末、閉塞感に悩む多くの人たちが「何かが起こるかもしれない」と期待を抱いた気持ちはよく分かるが、それはマスコミによって作られた虚像でしかない。自民党「名門」宏池会会長加藤氏が「ポスト森」の最有力候補だったのは、ひとえに人材不足のなせる業だったからだ。

なぜ、「今」だったのか。

これまでに二度、彼には決起の機会があった。最初が、小淵首相が突然の病に倒れ、五人組が密室で後継ぎを決めた時。次が、六月の総選挙で自民党が敗北した時。どちらも党内と世論に対し、総裁選を訴えられる絶好の機会だった。だが、九九年秋の総裁選で勝ち目のない戦いを小淵首相に挑んだ彼は沈黙を続けていた。それが急に「支持率が低いから」。折しも臨時国会まっただ中、補正予算を

はじめ少年法や警察法の改正等々、重要法案が目白押しだった。そんな時、内閣不信任決議案が可決されれば、衆院解散、つまり審議中の予算・法案はすべてパーになる。そんな国政のことより権力闘争のほうがよくほど重大だと、まさか思っていたのではあるまい。

党にとどまらずたまたま党を改革したいというのであれば、まずは党内で堂々と政策論を戦わねばならない。マスコミに登場し、ネット上で訴えて民意を味方につけるのは、その後やるべきことである。

そもそも野党提出の内閣不信任決議案に賛成するのであれば離党するのが、政党政治のイロハである。古今東西、大義名分なしに事が成功した試しはないはずだ。だから、同調者はそれほどいないだろうと踏んでいたが、予想に反し、可決の可能性は日に日に高まっていた。

そして、「決戦」の十一月二〇日夜。たまたま我々参議院同期の忘年会の席上だったが、隣に座った議員（前県議）がこう言って、私を驚かせた。

「僕は、あの二人はきつと欠席すると思うよ」

「まさか」言下に否定した。「そんなことをしたら、彼らの政治生命はなくなりませよ」それが世の中の常識というものだ。これがヤクザだったら、文字どおり、命を失くすだろう。だが、

「僕は長年、県連の幹事長をやってきたから分かるんだけど……執行部は、あれだけ党内で強く要望しているのに、なかなか除名に踏み切らなかつた。やっと離党勧告はしたけど、内容証明郵便で時間を稼いで、離党しなければ今日の正午までに除名と言つてたけど、それもしない。これはつまり、水面下での話し合いが進んでいると見るべきだ」

えっと声が出そうになつた。彼は続けた。「それに、もともとが酒席で、弾みで言い出したことでしょう。大した決意はなかつたのに騒ぎが大きくなつて、後は引くに引けなくなつたというだけだろうから」

そう、まさにそうだったのだ。と気づいたとたん、まさかの「欠席」説がにわかに現実味を帯びてきた。「どう、賭けない?」。賭金は一万円。私は首を横に振つた。その選択が正解だったことを、三時間後、テレビで知つた。

「長いドラマ」は、一幕一場の途中で一方的に打ち切られ、固唾を呑んで見守っていた観客が味わつたのは最悪の後味の悪さだけだった。政治家が公約を守らないことにはもはや誰もが慣れつこだが、期待をかけた分失望も

大きく、政治離れが一層加速した。こんな無責任な大人たちを見て育つ子どもたちの将来は、暗い。それが何より、辛い。

「執行部の切り崩しが激しかった。そんな分切り切つたことを元幹事長が公言するほうがそれが恥ずかしい。極めつきが、「名誉ある撤退」。私が「名誉」なら、絶対に名誉毀損で訴えてやる。言葉を軽々しく使つてはいけない。「失言」首相が非難されるのは、政治家にとつての命は言葉だからではないのか。

加藤政局に学んだことは多い。大義名分。適正な手続。冷静な戦略。着手の時期。部下の掌握。とにかく政界というものの、まだまだ容易には読み解くことのできない、奥の深い(?)世界ではある。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る「生と死」』、『少年被疑者』、『女と男』の検事調査、『日本の司法文化』がある。一二月に『少年法は誰の味方か』(角川書店)が発行となつた(本誌ブックランド参照)。



ユーモアのセンス

佐々木 知子

ITとは一体、何ぞや。世界中に多大の疑問を投げかけたアメリカ合衆国の大統領選挙もひとまず司法決着し、新政権が誕生した。民主党ゴア対共和党ブッシュ。だが、政策に差はなく、争点もなし。「政策のゴア対人柄のブッシュ」。つまり、頭脳か人柄か、どちらを選ぶかの選挙。そして、結果としてなぜ（票差では勝つたにしても）頭脳が敗れ、人柄が勝ったのか。

これについて過日、世界屈指の日本政治の専門家、コロンビア大学カーティス教授の話を（日本人以上の流ちょうな日本語で）伺う機会があった。氏いわく、

ゴアは戦略を誤った。クリントン政権はアメリカに未曾有の好況をもたらし、それゆえにあの恥ずべきセックススキャンダルも大目に見られたのに、その負の遺産を引きずりたくないばかりに、あえて副大統領としての八年の実績は一切触れなかつた。

もっともこの戦略については、苦渋の選択を迫られたゴア側としては仕方がなかつたのだと言ふ識者もいて、面白かつたのはむしろ次の指摘だつた。

「ゴアは私も知っていますが、ユーモアのまつつたかない、面白くない人なんです。食事を一緒にするとしたらブッシュの方が楽しいだろう。そんな感覚で選んだ人が多かつた……」

ゴアは従来、優秀ではあるが堅物で面白み

に欠ける人物と評されてきた。スキャンダルなどもつてのほか、大学時代に知り合ったティツパー夫人との篤篤ぶりはつとに有名だ。父親は上院議員という家柄。ハンサムで背も高い。見るからに頭も良さそう。だが、私の周りの女性たちは皆、クリントンとゴアでは「クリントン」と言う（私もそうだった）。つまり、女好きという決定的なハンディにさえ退屈は負けるのである。

歌米では——ことに上流階級では——ユーモアは極めて重要な資質とされている。アジ研時代の経験で言えば、イギリス人にはウィットに富んだ会話で場を和ませる人が多かつた。日本人にあまり見られないのは、そうした文化や伝統がないからだろうが、今やユーモアは、人に好かれ異性にもてるのはもちろん、大統領の適性を決めるほどの重要な資質になつたようである。

ふと、ユーモアがあるとはどういうことなのか、考えてみた。

まずは当然、思いやりだ。別名、サービスピ精神。人を、その場を、和ませ楽しくさせようという気配りがないところにそもそもユーモアはありえない。

次に、心身共に健康であることだ。自らを振り返つても、体調が悪いとき、心配事に囚われているとき、あるいは仕事で忙しすぎるときには人を笑わせる余裕はなかなか生まれにくいものである。

しかし周囲には、常に快調とばかり、笑顔を絶やさず朗らかな人が、少数ながらも存在する。彼らも人間であるからには不調時はあるはずだが、それを決して表には出さず、周囲に目を配り、他人を思いやれる訓練を積んでいるのだろう。つまり、「大人」。イギリス人は「小型の大人」と考える子どもをそう羨望するのである。対して、自分のことしか考えられない、自分を客観視できない者は、たとえ体は大人でも、どれだけ知識を得、仕事がよくできるとしても、心は「子ども」なのである。

加えて、これは何にでも言えることだが、それなりのセンスが必要だ。すなわち、ある程度の素質。意欲。努力……

一般にセンスと言えば、服のセンスを指す。まずは色彩感覚。流行を採り入れながらも囚われず、己の体型をよく知り、長所を生かし短所を隠す客観性を持つこと。最も重要なのがTPOである。仕事か遊びか。誰と会うのか。そこで期待される自分の役割。自身の心地よさだけでなく、周りをも心地よくさせる気配りが肝要なのである。

つまり、センスの良さは独善性からは決して生まれず、普遍性が必須、だということである。ユーモア、また然り。

周囲を見渡すと、自分にしか分からない、あるいは人を傷つけるようなしやれやジョークで周りを白けさせる人が、往々にしている。



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る「生と死」』、『少年被疑者』、『女と男』の検事調書、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。一二月に『少年法は誰の味方か』（角川書店）が発行となった。

代わりに本人が大口を開けて笑つたりしている。これなら堅物の方がずっとまし。この場では、どんなことを言えば、人が笑つて場が和むか。そのTPOを機敏かつ誤りなく察するためには、最低限二ユースに後れず、様々なことにアンテナを広げておくべきだろう。センスを磨くのは何に限らず、一朝一夕にはいかないものである。

振り返つて、二〇世紀は物質的な豊かさを急激に追い求め、成功した代わりに多くのものを失つた時代だつたように思う。失つた心の豊かさを、人々との親密なつながりを、取り返していかなければと思う。唇に歌を、心に太陽を。そして、ユーモアを。

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）

組織の自浄能力

佐々木 知子

年が変わって、これほどの劇的な展開があるとは。この原稿を書いている現在（二月初め）の状況が一月後の発刊時にはどう変わっているか、読めないのだ。まさに、事実は小説より奇なり。目の前で起こることがすぎると、小説を書く気が起こらなくて困る（と言いつつ、自分にはまず困る）。

通常国会（会期一五〇日）は、七月の参院選をにらんで、例年より約一〇日遅く、一月末日にスタートした。「教育国会」になる予定が一転、スキヤンダル糾明国会。

理事長らが背任容疑で逮捕された（昨年一月）KSD事件が政界汚職に発展し、一月一六日、同僚議員が逮捕された。KSDに有利な国会質問をして二〇〇万円を受け取ったとされる受託収賄容疑。その前日、彼が九五年議員になる前の一五年間、秘書として仕えていた党参議院議員会長（当時）が辞職。続く一月二三日、KSDから一五〇〇万円を受け取った疑惑で、経済財政担当大臣辞職……。事件はリクルート事件を彷彿とさせる底なし沼の様相を呈してきた。

これまでどれだけ政治家と金に絡むスキヤンダルが繰り返されてきたことか。その度に腐敗一掃を唱えながら、結局何一つ変わっていない……。だが今度ばかりは、諦めに馴らされた我が国民も心底から怒っている。この際、汚職政治家は皆捕まえて一掃しろ。それは、時期を同じくして、外務省幹部によ

る数億円の機密費用疑惑が明るみに出たからではないかと思う。

官僚への評価は大蔵省の接待汚職摘発あたりから地に落ちてきたが、今度は、血税から甘い汁を吸い、あろうことか競走馬まで買っていたのだ。国民の血と汗の結晶、税金。この不況の中、多くの国民は日々の暮らしを切りつめ、税を納めさせられているのだ。怒り心頭に発しないほうがどうかしている。外務省の外交の無能ぶり（！）は熟知しているつもりだったが、やはりその背景にはこれまでの腐敗が存在したのだ。大金を使用し、支出するのが同一人物。しかも六年間も同じポストに居続けた。それは、その事態を黙認し、利用し、享受する、彼より上の立場の人間がいたからだ。どうか考えられない。まさに構造的組織的な犯行である。

内閣支持率が低迷している原因は、これまでひとえに首相個人の失言ないし不人気によるものとされてきた。だが、ダブルスキヤンダルによって様相が一変。もはや首相を別の誰かにすげ替えれば済む次元の問題ではなく、構造そのものの問題ではないかと国民は気づいたのである。

問題は、組織に自浄能力がないことである。外務省の調査結果はあまりにお粗末にすぎた。当の幹部がいくつも持っていた銀行口座中、調査は一行のみ。特定額はわずかに五〇〇〇万円強。でいながら、外交機密費（報償

費）ではなく内閣官房機密費であり、個人の犯行とだけはいきり切った。告発を受けた警視庁はこの際、正当な怒りを共有している国民のために徹底的な真相究明をしてほしいと心から願うものである。

片や、自民党なる組織。

五人組で首相を決めた一批判にもまるで懲りなかったと見え、後任の議員会長もまた密室で決定。民主主義は結果にもましてそれに至る手続を重視する主義だというのである。

そして、野党が通常国会開会前に予算委員会を開催、証人喚問を要求しているのに、拒否。開会后ようやく応じる姿勢を示したのもつばら国会対策である。なぜ自ら調査委員会を立ち上げて真相を究明するくらいのことをしていないのか。自浄能力があることを積極的に国民に示さなければ、もはや組織自体が滅びるかもしれない深刻な危機状況にあるのだ。そう考える党議員は私を含めてかなりいるが、上の人たちとの温度差がずいぶんあるようだ。もちろん本来は、国民に選ばれた国会議員自らが国民に対して疑惑を弁明すべき責任があると思うのだが。

検察には政治的決着など決してなきよう、ただ職務に忠実に真相究明を、と願っている。もつとも検察が過度な期待を担う国家は決して健全な国家ではない。政治の清浄化は本来主権者である国民が担うことだからである。参政権の行使を通して、より良い代表者を選

ぶ。腐敗した政治家は落選する、となれば腐敗はできない。結局国民は、自らに合った政治家しか持てないということ、一人ひとりが自覚するところから再生は始まるのだらうと思う。その意味において、やはり国家改革は究極教育改革なのかもしれない。

国家の在り方を根本から見直す。どんな国家を我々は持つのか。だが、新世紀の海原に出た日本丸は、山積する懸案事項の舵を取る前に、スキヤンダルの沼に舵を取られて身動きができないでいる。国際化もIT革命も虚ろに響く。昨今、焦燥感は大い。

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月、参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る「生と死」』、『少年被疑者』、『女と男』の検事調書、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一二月に『少年法は誰の味方か』（角川書店）が発行となった。



権力と「権威」

佐々木 知子

前回危惧したとおり、二月初めからの一か月余に「大事件」が次々に起こった。

検察の捜査情報漏洩（判検の不祥事）に続いて、米原子力潜水艦による民間実習船沈没事故。折から民間人とゴルフを楽しんでいた首相は、一報を聞いてもなおブレイを続け、危機管理能力を問われた。党内でも、「そもそもなぜ（不祥事でも）め、予算案審議で大変な）こんな時期にゴルフなどするのか」、「なぜすぐに官邸に戻らないんだ」と批判が沸騰。しかも、素直に謝らない態度に愛想を尽かす人が続出。駄目押しのようにゴルフ会員権疑惑までが明るみになり、元々低迷していた支持率はついに消費税と同程度にまで落ち込み、合わせて株価低下も危機的状況となった。

ちなみに、KSD、機密費に危機管理、会員権、株価を併せて5Kと呼ぶそう。5K筆頭のKSDでは、「参院のドン」と言われた前議員会長が証人喚問され、その翌日受託収賄容疑で逮捕……。本日に毎日、いろいろなことが起こるものである。

結局、戦後五〇年を経て、制度疲労が起きているのだ。このことを別の面から考えてみた。「権威」の失墜である。

国会議員になつてから、教育問題についてよく考えるようになった。きっかけは、以前も書いた歴史教科書の驚くべき実態を知つてからなのだが、その後関心が広がり、月に何度か頼まれる講演でも教育の話をするこ

多くなつた。司法改革には関心がなくても教育問題に関心のない人はまずいない。教育はまさに「国家百年の大計」である。その在り方が人を作り、その集合体である社会を、そして国家を作っていく。

不登校、いじめ、学級崩壊、非行をはじめ数限りない問題の根っこには、モデルであるべき大人の自信喪失があり、世の中全般の権威失墜があるのでないだろうか。戦前怖いものは、「地震・雷・火事・親父」。同じように、「三歩下がって師の影を踏まず」。だが戦後、悪しき平等主義がはびこつたせいもあって、関係が消失、すべてがほぼ横並びとなつて、親も教師も権威を失墜したのである。

あるいは、「末は博士が大蔵か」。出世という夢への努力はひたすら賞賛されるべきものだったのに、今や「将来なりたい職業」には公務員や会社員が堂々と上位に並ぶ。もつとも、国のトップですらこれほど大つばらに嘲笑されるのだ。アメリカンドリームが今なお健在な国との大きな相違がそこにある。

ところで、よく混同されるが、権力は権威とは似て非なるものである。権力はその地位に就きさえすれば誰にでもついてくるものだが（人事権など）、権威はあくまでその個人のもの、つまり、その人の教養や人格、生きる姿勢といったものに発している。もちろん権力あるところに権威も伴うのがベストであるのはいうまでもない。

その意味で、中でも判検の不祥事は残念だった。日本の司法は、ほぼすべての機関が権威を失墜する中、かろうじてそれを保つてきた機関、だつたと思うからだ。

発端はつまらない事件だった。これが普通の主婦、たつたところも振り向きもしないような。超お堅い、誰もその「生熊」を知らない判事の、やはり知られざる妻の行爲だったからこそ、これだけのネタになつたのである。

しかし翻つて、もしこれが警察官の妻であつたなら、警察はそれを隠そうとしなかつたであろうか。「県警本部長の犯罪」は身内の覺せい刑取締法違反容疑を組織ぐるみで隠蔽しようとした罪だった。あるいはこれが同僚の検事の妻だつたら、検事はどうしただろうか。あるいは個人的に親しい人だつたら、どうしたのだろうか。

だがもちろん、やつてはいけないこと、だつたのである。権力を与えられた公人である以上、身内意識も私人としての当然の情も超え、罪は罪として、その身分や地位を問わず等しく扱い、裁く義務を負う。その義務を着実に遂行しているからこそ、そこに権威も伴つたのだ。しかも本件は、相手が検察寄りの刑事担当裁判官だつたからこそその漏洩、だつたのだらうから、何をどう言い訳しても癒着としかいいようがない。

当局も事態を重く受け止めて調査を進め、当の検事を六か月の停職処分（同日依願退職）



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る「生と死」』、『少年被疑者』、『女と男』の検事調書、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一二月に『少年法は誰の味方か』（角川書店）が発行となった。

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）

治安の良さ

佐々木 知子

今年二月、ボリビアに出張（国際麻薬統制サミット出席のため）したのに続き、三月末から四月にかけては列国議会同盟会議出席のためキューバに出張していた。中南米はまさに遠くて遠い国。こんなことでもなければめったに行ける所ではない。片道丸二日、おまけに昼夜逆転、季節も夏である。

我々司法関係者にとつて、中南米といえば薬物ないしは薬物密売組織。そして、治安の悪さ。ペルーの日本大使館占拠事件はまだ記憶に新しいが、日本人殺害・誘拐も依然よく起こる。その点、カストロ率いる社会主義国キューバの治安はむしろ良くて驚かされたが、帰途立ち寄ったメキシコは典型的な中南米だった。強盗など日常茶飯で、日本人は格好のターゲットのため、観光客誘致もままならないという。

伝統的に「水と安全はただ」と思ってきた我々日本人。だが、一度でも海外に出れば、これがどれほどありがたいたいことがよく分かる。水道水は飲めなくて当たり前。男性でさえ夜一人で道を歩くのは危険である。

だが、その幸せな国日本の治安が最近どうやら悪化しているらしい。今年三月、内閣府が発表した「社会意識に関する世論調査」によれば、「悪い方向に向かっていく分野」として「治安」を挙げた人が二六・六パーセント。九八年の前回調査時より七・八ポイントの増である（ちなみに、

「教育」は二六・二パーセントで、前回時より九・一ポイント増。同時に、「日本の国や国民について誇りに思うこと」では前回トップだった「治安の良さ」が四位に転落した（三〇・〇パーセント。ちなみに一位は歴史と伝統、二位は美しい自然、三位は文化と芸術）。

この世論調査がことさらシヨクシヨクなのは、前回調査時には既にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こり、国民が治安の悪化を如実に感じていたはずだからである。九七年には神戸の少年A事件が起こり、以後少年犯罪の凶悪化はとどまるところを知らぬ感がある。最近さらに治安が悪化したと国民が感じる理由は何だろうか。

数字として顕著なのは、検挙率が低下していることである。周囲で起きる事件、ことに凶悪事犯が未解決のままだと国民は安心感を得られない。

日本の警察が七〇パーセント（刑法犯）という世界一の検挙率を誇ったのも今は昔、八八年に六〇パーセントに落ちて以後低下の途をたどり、九九年にはついに五〇パーセントになった。交通関係係業過を除けばこの数値はさらに低くて三四パーセント、つまり三件に二件が未検挙である。主要因はもちろん、刑法犯の圧倒的多数を占める窃盗犯の検挙率が低下していることにあるだろうが、凶悪事犯の検挙率も軒並み低下している。同じく九九年の数値で見ると、殺人九六

パーセント（前年比一ポイント減）、強盗六六パーセント（同一〇ポイント減）、放火八四パーセント（同三ポイント減）、強姦七四パーセント（同一五ポイント減）。体感されることで顕著なのは、来日外国人による犯罪である。例えば、新手の住居侵入窃盗として知られるピッキング。検挙者の八割は中国人だという。この種犯罪に対処するためにはまず、その潜在的要因である、二九万人とも言われる不法滞在者の摘発が肝要だ。入国管理業務の強化充実、海上保安庁など関係諸機関が有機的に連携することがますます奨励されなければならない。

この世論調査報道の後、またまた憂慮すべき報道に接した。我が国における行刑施設収容者は拘留所、刑務所合わせても五万人程度収容率九割程度で推移している（だからこそ手厚い矯正が可能なのだ）と堅く信じてきたのに、実態は、ここ八年間増加の一途をたどり、ついに昨年末時点で六万人を超えたというのだ。うち刑務所収容者は五万人に達し（前年比一〇パーセント増）、収容率はなんと一〇四パーセントになったという。となれば、物理的にも六人部屋に七人収容などの措置をとらねばならなくなる。このままで推移すれば早晩、我が国もまた、刑務所の過剰収容で悩む他の国々と同じ轍を踏むことになるやもしれぬ。

在留邦人が五世まで一万人以上いるメキシ

コ。日本と違って金利は高く、一億円あれば遊んで暮らせるという。老後の生活としては悪くないかと一瞬思ったが、すぐに思い直した。治安が悪くてはたとえその他のすべてが良くても駄目だ。殺人や誘拐がいろいろニューズにもならない国で、常に襲われるおそれを感じながら過ごすのはどれほどのストレスだろうか。日本に住む外国人女性いわく「女性の質」が極めて高いと。日本の誇るべきところは「治安の良さ」だと胸を張れる社会を取り戻すべく、我々は大いに頑張らねばならないと思う。

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る「生と死」』、『少年被疑者』、『女と男』の検事調査、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一二月に『少年法は誰の味方か』（角川書店）が発行となった。